

江戸幕府の成立と小名木川の開削

江東区深川江戸資料館

江東区のほぼ中央を東西に一文字に貫くように位置する小名木川は、江東区域の発展や人々の暮らしと重要なかわりを持っています。小名木川を語らずに江東区の歴史を語ることはできないと言って過言ではありません。

資料館ノート第33号から38号まで、6号に亘って、この小名木川の歴史・民俗・流域の史跡や文化財について紹介していくことにしましょう。

小名木川の概略

現在の小名木川は、全長約4,900m、最大巾（小名木川橋付近）約50m、最小巾（丸八橋付近）約26mで、地図で見ると東西に引かれた一直線のように見えます。この端正な線は、人工の運河であることを物語っています。東端は旧中川、西端は隅田川と合流し、隅田川と旧中川を結ぶ運河であることがわかります。

潮の干満による水位の変化はありますが、どちらの方向からどちらの方向へ向かって流れているのか、というのは難問です。ほとんど流れていません。しかし、河川法（法律）上は、荒川水系の一河川として位置づけられているため、荒川側を上流、隅田川側を下流と呼ぶことになっていて、「右岸」「左岸」という表現を用いる場合も、上流方向から下流方向へ向かって右・左を見ます。北岸の大島・猿江・森下・高橋・常磐を右岸、南岸の東砂・北砂・扇橋・白河・清澄を左岸と呼ぶことになります。現在は、「北岸」「南岸」の表現を用いることが多いので、混乱することはないと思いますが、小名木川のエピソードのひとつとして、念頭に置いておくといえでしょう。

徳川家康の関東入国

古代から中世にかけて、江東区内の地名が記録にみられるのは、亀戸と考えられている「亀津」のみで、そのほかは、広大な干潟であったのだろうと考



文久2年『深川絵図』より

えられています。

江東区域を含む東京低地の姿が大きく変化していくのは、天正18年（1590）の徳川家康の江戸入府の後です。

多くの武将が互いに戦いを繰り返した戦国時代が終わり、豊臣秀吉が後北条氏を滅ぼした後、後北条氏が領有していた伊豆・相模・武蔵・下総・上野・上総の一部は、徳川家康が領有することになりました。それまで家康は、三河（愛知県）を中心に勢力をのぼしてきた戦国大名です。東海地方における家康の権力は強大で、豊臣政権のもとで家康を従わせるためには、関東に移すことが必要であったといわれています。

こうした背景のもとで、豊臣家の一大名として関東六か国の領主となった徳川家康は、居城を江戸に築きます。しかし、家康の入国当時の江戸に関する記録はありません。いずれも後世に作られた記述で、正確なことはわかりませんが、これらの記述に共通していることは、家康を迎える前の江戸は、田舎の風景が広がるひなびた土地であったことです。

初期の家康の政策と小名木川

入国後の家康が着手したのは、まず有力家臣たち



小名木川が隅田川に合流する位置。現在では、「隅田川テラス」の名称で水辺の遊歩道が整備されている。(奥に見えるのは清洲橋)

への屋敷地拝領と、道三堀・小名木川の開削などです。

家康が征夷大將軍に任じられた慶長8年(1603)3月以降は、江戸城や市街地の工事は、規模もその意義も異なったものとなっていきますが、豊富政権下の一大名として家康が行った城下町建設のための最初の事業が小名木川の開削などの事業であったことは、大きな意味を持っています。小名木川は、『新編武蔵風土記稿』(天保元年=1830完成)、『葛西志』(文政4年=1821完成)ともに、慶長年間の開削であると記しています。ともに、天正18年(1590)8月に江戸に入府した家康が、行徳と江戸城を結ぶために開削に着手したと述べています。その目的は、行徳の塩を江戸へ運ぶため、と記されています。小名木川は、まさに、征夷大將軍に任じられ、江戸に幕府を開くことを予期していたかのように、開府と同時に完成をみた土木工事であったということが出来ます。

小名木川の成立と小名木四郎兵衛

小名木川は、「正保国絵図」に「ウナギサヤホリ」とみえるもので、『葛西志』は、「うなぎさわ堀」の誤りであるとしています。元禄6年(1693)に刊行された「江戸正方鑑」という地図には「ウナギサハホリ」、享保元年(1716)刊行の「江戸図」には「オナキ川」と記載されています。「鰻」の音が「おなぎ」に転じたという説の根拠となるこれらの記述からは、当初は「ウナギサワホリ」とよばれ享保以降「小名木川」の名称が定着したのではないかと考えられます。

一方「小名木」の名称は、「鰻」ではなく開削にあたった人物の名「小名木四郎兵衛」に由来するという説は、『新編武蔵風土記稿』の記述によって確

認できます。同書によれば、小名木四郎兵衛は、天正年間に小名木村を開発した人物であるとされていますが、これ以上詳しいことはわかりません。

名称の由来にも開削者にも不明なところが多いのですが、江東区域の初期の開発を考える上で、小名木川は、近世初頭に干潟前面の水路を確定し、同時に小名木川以北の干拓地の排水路の役割を果たしたものとして評価されています。

その後の開発と小名木川的发展

小名木川の北岸に位置する深川村は、深川八郎右衛門が摂津国(大阪府)から来て開発したと伝えられます。徳川家康が鷹狩りに来て、八郎右衛門に地名をたずねたところ、地名は無いと答えたため、家康の命により八郎右衛門の名字を地名とし、新田開発を行うことになったのが慶長元年(1596)のこととされています。現在の森下1丁目の深川神明宮付近が「深川村発祥の地」です。

ほぼ同時期に、小名木川の対岸では「海辺新田」の開発が始まります。そして、寛永6年(1629)には、隅田川合流点の南岸の清澄からさらに南へ続く「深川獵師町」(第32号に詳述)が開発されました。

深川の地の開発は、小名木川から始まったとみることが出来るでしょう。

小名木川が東端で合流する中川の対岸からは、船堀川・江戸川を通り、利根川水系に至ります。江戸時代から明治時代にかけて、鉄道網が整備されるまでは、小名木川は、江戸・東京と関東・東北を結ぶ重要な交通路として深川的发展に寄与しました。

小名木川は、江東区を代表する河川として昭和56年4月、江東区文化財条例による登録史跡となっています。



旧船番所(常磐1-1付近)あたりから万年橋をのぞむ